

取り柄のない私

高橋 秀美

私にはさしたる取り柄がない。少年時代を思い返し、活躍の跡を辿ろうとしても……。思い出せない。学業成績は、ほぼ一貫して中程度。小学校の分数のテストで零点をとり、さすがに愕然としたことを憶えている。これは全く自慢にならない。

生徒会役員や学級委員といったリーダーとしての経験も皆無である。そもそも自分にはそのような素質がない。後から付いて行く方が楽で、自ら役割を買って出るというようなことは、実際、今もない。

運動面での実績もない。中学・高校時代は、バレーボール部に所属していた。高校では二年からレギュラーだった、と言えば聞こえは良いが、部員不足であっただけのこと。しかも、その年の春季地区リーグ戦は六戦して全敗。実は、唯一不戦勝があった、なんてとても言えない。心の傷もとても癒えない。

そのような訳で、大学進学に向けて自分の進路を決めるときには本当に困った。自分の個性や特性を伸ばすためにか、追究したいことを学ぶためにか、そんなことを真面目に考えれば考えるほど暗澹とした。なぜなら、私にはさしたる取り柄がないからである。ところが、窮すれば通ず、である。

中学時代、私はジュニアものの軍記物を好んで読んだ。武士の生き様に惹かれるところがあつたからである。ただし、それは社会科の授業の影響ではない。きっかけは図書委員になつたことである。推薦され無投票で選ばれた。無論、高橋が適任などという理由からではないことは、私自身がよく知っている。当時、中学の図書館は別棟であつた。だから、校舎から続く石畳の道を、雨の日は傘を差し、雪の日

は雪掻きをして行くのである。加えて図書当番がある。要するに、面倒なのである。図書委員を希望する者は、誰もいなかった。

ある日、私は書棚を整理していて、軍記物と出会つた。それは書棚一つをまるまる占領していた。平家物語、太平記……、どれも装丁が立派で分厚い。手に取ると重さがズシリと伝わってくる。私はそれを借りて読み、書棚一つ分を読了した。何の苦にもならなかつた。面白かつたからである。日本の歴史に興味をもつようになり、好きになつたのである。

大学進学の時、そのことを唯一無二の手掛かりに据え、「歴史」を職業にして生活できないだろうか、と考えた。その結果、教師という職業に辿り着いたのである。自分の大好きなことを職業にする、それは自分の幸せである。しかも授業を受けた生徒が面白いと言う、それは生徒の幸せである。自分と生徒が共に幸せになる、これほど素敵な職業はない。

こうして私は教師の道を志し、昭和四十七年四月、東京都公立中学校社会科担当教諭に就いた。

その後、私は担当職務の関係で、図書館に通い詰めた時期が幾度もある。ただし、それは目的があつたことで、目的を達成すれば終了する。

その点、中学時代の私と図書館との出会いは全くの偶然で、そこでたまたま軍記物を手にしたことが今につながり、私の人生を決定付けた。こうした予期せぬ邂逅を、図書館はもたらすものなのである。

たとえ偶然からとは言え、生まれ変わってもなお中学校社会科教師になりたいと答える、取り柄のない私が、今ここにいます。